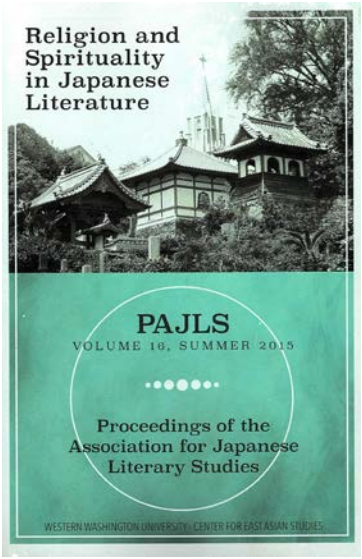
「「闇市」のマリア—佐多稲子「風になじんだ歌」に見る戦後の焼け跡からの出発—」
"'Yamiichi' no Maria: Sata Ineko 'Kaze ni najinda uta' ni miru sengo no yakeato kara no shuppatsu"

Ihara Miyoshi 伊原美好

Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies 16 (2015): 171–193.



PAJLS 16:
Religion and Spirituality in Japanese Literature.
Ed. Massimiliano Tomasi.

「闇市」のマリア
—佐多稲子「風になじんだ歌」にみる戦後の焼け跡からの出発—

伊原美好
城西国際大学

1、闇市の発生

1－1　占領・闇市・街の復興

佐多稲子は、処女作「キャラメル工場から」[1]で作家として出発して以来、一貫してジェンダーの視点から女性たちの生きる姿を表現し続けている作家である。

佐多は「風になじんだ歌」で、１９４５（昭和２０）年８月１５日の日本の敗戦からまもない10月、新宿駅東口近くの闇市の一画に、いち早く酒場「芳野屋」を開いた「マダム」の記憶を表象化している。「マダム」志保にとっての新宿は、自己の居場所、長く親しんできた古巣であった。そして、「下駄の足を踏みしめ」ながら、素足で歩く「命をかける街」であった。戦争という惨事のあとの混乱の中で、毎日、割烹着姿で酒場に立つ「マダム」と底辺に生きる女性たちを、ジェンダーの視点から見つめ直している。

「闇市」[2]とは、資材・食糧等の不足を補うための物資を求めて集まった人々の群れであり、売れるものは何でも売るという「特定の場所に限定されない違法の流通制度」[3]であった。その意味で闇市は、秩序なき市場空間であり、生きることを求めた人びとの渦巻く欲望の集積として出

1『プロレタリア芸術』(1928・2月号)
2 「ヤミ市」「青空市場」「街頭市場」「自由市場「露天商」とも言う。震災・戦争等の混乱時に施行された配給制度や、価格統制制度等に違反して行われた取引を「ヤミ取引」と言った事に由来するが、本論では「闇市」を使用する。
3 マイク・モラスキー編『闇市』(皓星社 2005·9)

現した、言ってみれば、さまざまな人間の混在する日本国内に出来た荒涼たる「外地」のような存在であった。そこは、逞しく生きよすとする人々の息吹と、旺盛な熱気とエネルギーを孕んでいた。まさに、闇市は、日本人にとって戦争の傷跡から再生するための、「いのちの街」であったと言える。

敗戦という現実は、人間の生存への不安をむき出しにしていた。昼夜たえまなく空爆を受けた東京[4]や多くの地方都市、特に原爆で破壊された広島・長崎においては、命あるものがすべて息絶えたのではないかとさえ思へる鬼気迫る焦土が、累々と広がっていた。焼死体やうずくまる重傷者も放置されたままの惨状であったし、「外地」からの多くの軍人や民間人引揚げ等による帰還者[5]、帰還者を待つ家族、仕事と食料を求めた人々、肉親を失った幼い子供たちは泣く力もなく、ぼろを引きずりながら浮浪児となって闇市を彷徨していた。佇むのがやっとの生き延びた人々の顔面には、まるで生気はなかった。

「風になじんだ歌」[6]の冒頭で、佐多稲子は、この敗戦後の東京新宿の状況について象徴的に以下のように描いている。

「そこは、いのちの街だった。今そこは、いのちの生の姿で、よろばいながらしかも殺気に満ちていた。焼け残ったビルが脚元を露出して荒れた肌をさ

---

[4] 本庄慧一郎『新宿今昔ものがたり　文化と芸能の三百年』(東京新聞出版部 2010.6)によると、首都東京は 1942（昭和 17）年 4 月 18 日の最初の空襲から終戦当日の午後 1 時 20 分までの間に、昼夜の別なく 122 回の空襲を受け、延べ 4870 機によって 1 万 1 千余発の爆弾と 38 万 9 千余発の焼夷弾が投下されている。死者 9 万 6 千人、負傷者 7 万 1 千人、76 万 7 千戸の建物が焼失または破壊されたとある。

[5] 日本の敗戦後、中国大陸や朝鮮等から、いわゆる「引揚げ」をした人の数は 650 万人に及ぶ。その内訳は、浅野登美『帝国日本の植民地法制』(名古屋大学出版会 2008)によると、民間人 341 万人、軍人・軍族関係 311 万人であった。

[6]『佐多稲子全集』第 13 巻　(講談社 1979・1)

らしていた。駅の正面に高くはめ込まれた大時計は、傷痕にうなだれて針をとめたままだった。焼けあとの空地から舗道へかけて、葦簀張りの店が同じ格好で並び、スフの下着や、鍋や下駄や、食べものを売っている。男たちは戦闘帽のまま、肩から袋を下げて歩いていた。うす汚れた白と褐色の雑閙の中に、もんぺの女たちもその色にとけて、何かの風呂敷包みをかい込んで歩いていた。みんな同じような顔をしていた。同じような顔で混じり込んでいながら、誰も、すれちがう相手を見ようとしなかった。どの顔も、地べたに坐ることに慣れた顔だった。空だけは、秋の澄んだ色で展がっていた。その下で街は、いのちにうごめいていた。」

マダム「柳井志保」は、自身の逞しい才覚と経営手腕で、敗戦から都市・新宿の日々の復興の中で、そして殺気立つ闇市の中で、「よろばいながら」生きる底辺の女たちの「生」と「性」に寄り添い生き抜いた。佐多稲子自身、「時と人と私のこと一発表誌と作品の関係」(12)[7] に、敗戦時の混乱を逆手にとり、復興の波に乗って新宿の闇に生き抜いたモデルとなっている自身の若き頃の友人 [8]を、「彼女の姿を通じて、敗戦直後の困難の中を生き抜いてゆく意欲というものを描きたかった」と記している。また、マダム「志保」と関わりあった人々を、「戦争の悲惨さが関わっていたから、私はあの人たち」[9]を書き止めておきたかったと記している。

本論では、「風になじんだ歌」の冒頭で、佐多稲子が表象した「いのち

---

[7]『佐多稲子全集』第 13 巻 (講談社 1979・1)

[8] 佐多稲子は、小説「街の中」[別冊文芸春秋 41 号 (1954・8) 128-215 頁] においても、この友人である酒場の「マダム」を「三鈴」として取り上げている。表現された友は、店舗が異なるが、丸善書店の若き頃の同僚であった。佐多は生家の急激な没落後、長崎から上京、11 歳頃からキャラメル工場の女工、「清凌亭」の小間使や女中、丸善書店の女店員等を経験している。

[9]佐多稲子にとって、「三鈴」という名前が示すごとく、この女人はさわやかな鈴音のような凛とした人であったと思われる。また、「風になじんだ歌」のマダム「志保」のように、確固たる「志」を「保」ち、風になじんで佇む柳のように逞しい女性と感じていたのであろう。

の生の姿で、よろばいながら」逞しく生きる女性たちに視点を置き、連合軍の占領前後と敗戦から10年間の新宿の急速な復興、闇市の変遷の中で生きた割烹着の「マダム」と彼女を取り巻く「性を売る」女たちの姿を追求しようとするものである。まず、この闇市とは敗戦後の日本の人々にとって何であったのか。次に、占領による「性の管理」の実態と、闇市の中で「性の管理」からも周縁化された「性を売る女」がどのように表象されたかを分析する。

日本の敗戦は廃墟・絶望・食料難で始まった。既存の価値観、秩序、法律、思想も通用しない地平に出現した闇市は、生き残った人々の出発点、あるいは日本人にとって生きるための起点であったことは間違いない。

敗戦後またたく間に出現した闇市または露天商というブラック・マーケットの実態を見てみよう。闇市の発生は、敗戦後突然発生したものではなく、次のような３つの時代状況の中に見られる。まず、１９２３（大正１２）年の関東大震災後、壊滅的打撃を受けた東京に出現した「青空市場・露天商」が闇市の始まりある。次に、１９３９（昭和１４）年、米穀配給統制法が公布されると商工省管理のもとで配給制度が実施され、加えて、すべての産業物資や生活物資の価格が価格形成委員会で決められた公正価格で統制された。そのため、配給物資の不足と価格統制の不満から、法律の網をくぐった「露天商」（ヤクザの前身）が全国的に急激に形成された。さらに、１９４５（昭和２０）年の敗戦後に台頭した「露天商」集団が、大規模な闇市を形成していった。これが、ここで論じる闇市である。帰還軍人や引き揚げ者などで急増した人口、それに対し配給物資では飢えた人々の空腹を満たすことが不可能であった事、圧倒的な物資不足から、人々が集まる場所に瞬く間に出来上がった。

つまり、闇市の発生は、復興期の日本人の生活再建と急がれた都市復興の裏に無秩序に発生した集団である。国家からの主食配給は、成人一

人あたり、一日米に換算して二合一勺、それも芋、芋のツル、芋のクズ、大豆、澱粉、麦粉などが代用で支給され、カロリーは１日一人あたり１２００カロリーにしかならなかった(全国農業会調査による)。最低必要カロリーは、肉体労働者が１日３０００カロリー、普通人が２４００カロリーと計算されていたから、その半分に満たない配給であったのだ。そのため飢えた人々は、不足分を闇ルートで補った。天井知らずのインフレに加え、１９４５（昭和２０）年１１月２０日には、生鮮食料品の公定価格が撤廃された事から、食料品の価格は暴騰、食料問題は一層深刻な問題となった。人々にとって、闇物資を拒否して生きることは、餓死を意味することであったからだ[10]。

闇市においては、国籍、階級、身分、出身、学歴等は全く問題にもならず、華族も、ヤクザも、軍人も、引揚者も、被差別部落の窮民も、解放国民も同格であり、路上に莫蓙を敷いて商売が可能であった。そのため、またたく間に治外法権なる空間を生みだし、そして秩序なき解放区となっていった。「ヤクザ」集団が強力な闇集団（暴力団）を結成、「第三国人」[11]が闇の権力を持ち、街には「体を売る女」たち、この女たちに依存する男たちがあふれ、闇市は、富と貧困という更なる格差社会と頽廃を生みだしていった。

さて、敗戦後の闇市の出現は、１９４５（昭和２０）年８月１８日、終戦３日目の朝日新聞等の都内主要新聞に掲載された１本の広告から始まった。

---

10 判事・山口良忠は、1946年始め頃から闇米を拒否、配給米のみで生きようとしたが、1947年10月栄養失調で死去する。山口判事は、東京区裁判所の経済事件犯専任の判事であり、食糧管理法違反事件を担当していた。被告人のほとんどが闇米所持で検挙された人々であった。日本の食糧難の現状と法律の板ばさみで闇米を拒否していたのだ。配給された米のほとんど自分で食せず、２人の子供に与えていた。

11 「朝鮮人、中国人、台湾省民」と呼ばれていた日本の植民地・旧占領地地域の人々であり、「解放国民」とも言われる。

転換工場並びに企業家に急告！平和産業の転換勿論、其の出来上がり製品は当分自発の「適正価格」で大量引受けに応ず、希望者は見本及び工場原価見積書を持参至急来談あれ

新宿マーケット　関東尾津組　淀橋区角筈１の８５４
（瓜生邸跡）

この「適正価格」とは、闇値と公定価格の中間をゆく「尾津式価格算定方式」であり、手持ち資材原価の７割に工賃・工場諸掛・利益２割を加算した価額を工場の適正価格としたものだ。これに利益を加算し闇市の小売価格とした。このように法外な価格でなく理論的なものであり、後に東京都が採用した「査定価格」と同じ性質のものであった。夜、新宿駅の改札口を一歩出ると、東口には、正面に銀行と「二幸」(現在のスタジオアルタ)が焼け残って黒くそびえ、明かりはなかった。こうした時期、新宿に戦前から根をおろし、露天商を統制していた「ヤクザ」、関東尾津組尾津喜之助がその広告主であった。終戦で納入先を失い、製品・半製品をかかえ途方にくれていた軍需産業の下請け業者向けの広告であった。尾津の価格設定に共鳴した人びとが、広告掲載の翌日から集り、物資を生かし、加工しそして露店で並べたのだ。たとへば、軍刀業者には包丁やナイフ、鉄兜業者には鍋に加工することを進めたのである。こうして確保した物資を中心に、８月２０日には「光は新宿より」をキャッチ・フレーズに、関東尾津組尾津喜之助は葦簀張りの通称「尾津マーケット」（新宿マーケット）の第一号店をオープンした。店頭に並べたものは、『東京闇市興亡史』[12]によると、「日用雑貨で、値段はご飯茶碗１円２０銭、素焼き七輪４円３０銭、下駄２円８０銭、フライ鍋１５円、醤油樽９円、ベークライトの食器、皿、汁椀３つ組８円等」であったとい

[12] 猪野健治編『東京闇市興亡史』（草風社 1978･8）

う。国家公務員の給与は１９４５（昭和２０）年末では、最低４０円から５２０円の時代であった。

また、路上に立てられた広告看板の「新宿露天商再開後挨拶」には下記のように書かれていた。

終戦ラッパの響きと共に、街を明るく便利にすべく、「買う身になって売る露店」建設を志し、新宿街頭に平和の新発足を致す事と成りました。然乍ら、物資不足の折柄、何卒皆様の「露店」として、よりよきご指導ご鞭撻を賜ります様切に懇願申し上げて、帝都復興に魁がけする露店再開のご挨拶に替えます。

新宿露店商代表　関東尾津組

さらに、復員兵を優先した男女の２００名もの求人を募集し、瓦礫と廃墟の中で、露天商が再開され、品物は飛ぶように売れた。その後、新宿東口、西口周辺に和田組の「和田マーケット」（武蔵野館から南口へかけての約４００軒）・安田組の「民衆市場」(西口の線路沿いにかけての１６０軒)、野原組等、さらに、池袋（池袋連鎖商店街・池袋戦災復興マーケット）・新橋（松田組新生マーケット）・渋谷（道玄坂恋文横町・道玄坂百貨店）・上野（御徒町アメヤ横町・近藤マーケット）等と急速に出現している。このように、闇市は「光は新宿より」をキャッチ、フレーズとして新宿に始まり、各地に広まった。１９４６年７月には、東京露天商同業組合には、約６万人が所属していたが、その構成割合は、テキヤ１９，５％、素人露天商７９，８％、その他（身体障害者等）が０、８％であった。圧倒的多数の素人露天商の内訳は失業者１９，９％・元商人等の商業者８，８％・元中小工場主等の工業者３，８％・復員兵８，３％・軍人遺家族１０％・戦災者２６，１％等であった。

関東には、秋葉原・有楽町・数寄屋橋・新橋・池袋・溝口・船橋、また、関西には、梅田・阿倍野・天王寺駅・三宮等の主要国鉄道駅、さらには、全国主要都市の駅近くに同時期に出現したが、１９４６年８月Ｉ

日の「八・一粛清」と呼ばれた全国一斉闇市取締りにより、闇市は撤退を余儀なくされた。経済の安定期に入ると闇市の大部分が繁華街や大規模商店街と変遷していった。新宿駅西口の思い出横丁、歌舞伎町の新宿ゴールデン街、上野のアメヤ横町、下北沢の駅前食品市場、吉祥寺のハモニカ横町、大阪の鶴橋商店街、神戸の元町高架商店街等のように現在もその面影を残し賑わっている。

また、闇市には、「第三国人」という強力な闇のグループがいた。日本の敗北により、強制労動等から解放されたが、何の保証もなく街に放り出された人達である。終戦時には、日本には２３６万５千余の朝鮮人、５万人を超える中国人（台湾省民を含む）がいたが、最終的には日本に約９０万人の「朝鮮人」と約４万人の「中国人」が帰国せず残留することになった。大部分が強制的に日本に連行され、炭鉱や鉱山、軍需工場、軍事施設建設のための労働力として徴用された人びと、さらに、朝鮮徴兵令、台湾徴兵令によって、「日本兵」として兵役についた人びととその家族である。就職先もなく、彼らは、民族的団結で結束し、市町村、都、国等の公有地を不法占拠し「解放区」を形成した。その中で、密造酒の生産、占領軍から食料品・洋酒・缶詰等を買い取り、数１０倍のプレミアムを附加し闇で売りさばき、強力な財産的基盤を固め、直営の露店商やマーケットを建設した。占領軍総司令部は、「第三国人」を「できる限り解放国民として処遇する」として処した事が、日本政府も関与不能な「治外法権」の空間、つまり「第三国人」が支配する闇市を容認することになった。このように占領政策は「第三国人」による闇市集団を差異化し、ヘイト・スピーチ問題をさらに強固に植え付けていったのである。禁制品が堂々と売られ、拳銃で武装した「第三国人」たちは、自警団を作り日本人を圧倒し、日本人との争いが絶えなかった。いわゆるパチンコ（遊戯）業界への進出もこの時期であり、根深く闇市で勢力を固めていった。１９４６年２月の警視庁の調査によると、指定出店区域２３５

か所に７万６千人余人の露天出店者が確認されているが、前述したように東京露天商同業組合には、約６万人所属していたと推定されることから、残り１万６千余りが「第三国人」集団であった事になる。

１－２　廃墟からの出発－占領下と「パンパン」と呼ばれた女たち

まず、占領下と「パンパン」と呼ばれた女たちの出現を見よう。敗戦後、日本政府は闇市を黙認したと同様に、「公的慰安婦制度」を容認している。

日本は１９４５年８月１５日ポツダム宣言を受け入れ降伏したが、すぐに日本政府は８月１８日特殊慰安施設協会（Recreation and Amusement Association 略称 RAA）の結成を指示、そして占領軍兵士のための「GI 専用慰安施設」設置に協力した。つまり、国家管理で「公的慰安婦制度」を認容し、日本に上陸する多国籍の占領軍（GHQ）兵士に性的サービスを目途とした施設を作り、性サービスを行う女性つまり「慰安婦」を積極的に募集し提供した。１億円の予算を投じ、その本部は銀座７丁目レストラン「幸楽」に置いた。「GI 専用慰安施設」設置の目的は、表面的には、日本の善良なる一般婦女子の貞操を守ることを大義名分としたものであった。それは、日本に上陸してくる連合軍兵士の日本婦人に対する強姦の恐怖からであった。帝国戦争の時代に、日本軍将校が満州はじめアジア・太平洋各地で多くの強姦事件を引き起こしていたことがトラウマになっていたからである。大々的に、国民にこのトラウマを吹聴と宣伝し、性サービスを提供する女性(接客婦)を募った。まず水商売の経験の豊かな女性（娼妓、女給、芸者等）をターゲットとしたが、意図したように女性(接客婦)が集まらなかったため、苦肉の策で、「女事務員募集」という下記ポスターを数週間にわたり東京・横浜一帯にはった。

新日本女性に告ぐ。戦後処理の国家的緊急施設の一端として進駐軍慰安の大

事業に参加する新日本女性の率先協力を求む。

女事務員募集。年齢 18 歳以上 25 歳まで。宿舎・被服・食糧など全部支給

日本政府の大義名分を覆し、皮肉にも、月収３千円[13]が保障される魅力的な職場として、生活難に困窮していた多くの善良な一般婦女子がこの広告に応募してきたのだ。「あくまで自主的」に参加した女性たちを、「特別挺身隊員」の名で、厳かに東京皇居前に招集したという。そして、RAAが考えた「GI専用慰安施設」に、「特別挺身隊員」とし配属し、性サービス業務を開始した[14]。GHQの勧告により「娼妓取締規則」の施行により「遊郭」の廃止を余儀なくされたが、旧「遊廓」の経営者に、雇用していた娼妓を積極的に「慰安婦」として占領者に差し出させたのである。１９４５年８月３０日には、厚木米軍基地に連合国最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥が来日、１９５２年４月２８日対日講和日米安保条約が締結されるまで、日本は連合軍(米軍人が圧倒的に多数であったこと、また、マッカーサーが米国籍であったことから、米国の占領下と一般的に認識されている)の占領下に置かれることになった。マッカーサー来日の２日前、８月２８日に占領軍兵士が日本に上陸、その日に「GI専用慰安施設」の第一号として東京大森の「小町園」が開設された。「性」に飢えた兵士たちが殺到し長い列が見られたと言う。数ヵ月後には、「GI専用慰安施設」の数は、東京・横浜の都市園を中心に２０か所以上に急増し、最盛期には７万人余の女性が、日本国家公認の娼館で「特別挺身

---

13 1946 年の東京都の巡査の初任給が 420 円の時代であった(『朝日クロニクル週刊 20 世紀　1946 年』) から、月収３千円は多額であった。

14 朴裕河『帝国の慰安婦　植民地支配と記憶の闘い』(朝日新聞出版 2014・11) で、「男性と国家と帝国」という普遍的な問題であった「慰安婦問題」を、先の見えない国家間の特殊な問題にしてしまった事に異議を唱えている。敗戦後においても、占領軍と日本国は「特別挺身隊」の名のもとに「慰安婦」を認容した問題は今も放置されたままである。

隊員」つまりいわゆる「慰安婦」として就業していた。

しかし、兵士の性病の急増により、早くも１９４６年３月２７日には閉鎖を決定。だが、RAA閉鎖後も、RAAの娼家の代替案ともいうべき「赤線地帯」という特定の区域内に限り、日本政府は「性サービス」業務を認可したのだ。そして、１９５８年４月１日「売春防止法」の施行により、この年の３月３１日午後１２時をもって廃止されるまで継続していた。特定指定地域として、もともと日本に存在していた「遊廓」があった地域に認可、警察がこの地域を「赤線」で囲んだことから「赤線地帯」と呼ばれた。それに対し、それ以外の地域は「青線地帯」[15]と一般に呼ばれるようになった。「赤線地帯」の性サービスのほとんどが、１階で飲食物を提供し、２階でセックスを売るという小さな空間で行われていた。RAA閉鎖により多くの女性が失職し、「夜の女」・「私娼」となり米軍基地がある街、闇市や繁華街等の「青線地帯」で性を売った。合法の「赤線地帯」は警察の地図上のみの管理であったため、「青線地帯」との区別が困難となり売春が氾濫したのだ。7万人余りの「特別挺身隊員」つまり「慰安婦」の多くは、街婦となり在野に下るしかなかった。この街娼たちは次第に「パンパン」[16]と呼ばれるようになった。皮肉なことに、米国を中心とした新しい豊かな文化を、この街娼・「パンパン」[17]と言われる女たちが占領兵士たちからいち早く受容し、彼女たちを通じて日本国内に新

---

15 小谷野敦『日本の売春史　遊行女婦からソープランドまで』(新潮社 2007・9)

16「パンパン」とは、街娼・売春婦を一般的に意味する。「パンパン」と同じ意味を表す言葉には、「ヤミの女」、「夜の女」、「バタフライ」、「オンリー・ワン」や「オンリー」等がある。兵士が夜、花街の表戸をたたいた音の印象から、また、植民地仏印に上陸した日本兵に、現地の女性たちがパンパンと手をたたき食料を提供したことから、さらに、娘を招き寄せるために男たちが手をたたいた音から広まった言葉であるとも言われるが定かでない。いずれも、「性」を売る女の隠微な呼称である。

17 マイク・モラスキー編『街娼　パンパン＆オンリー」』(皓星社 2015・11)で、モランスキーは「闇市が新時代を代表する風景だとしたら、パンパンは戦後最初の〈新人類〉といていってもよい」と言う。

しい戦後社会の文化をもたらし、そして、戦後の経済復興に繋がっていったのも間違いない。

売春等取締条令が施行され、RAA閉鎖後に解放された「性の市場」に蔓延した性病撲滅の名のもとに、占領軍と日本政府は合同で定期的に「パンパン狩り」を実施、多くの街娼を拘束し、強制的性病検査を開始している。街に立っていると言うだけで「パンパン」とみなされ無差別に、しかも、一方的にキャッチやレイドされて性病検査施設へ送られ屈辱的な性病検査を実施、そしてしばらく「更生」という期間が設けられ、その期間施設に留め置かれ解放された。まさに茶園敏美[18]が、「パンパンと判断されたおんなたちの取り締まりをレイプと同様、性暴力であると位置づける」と指摘するように、「性の管理」の名のもとに国家による「人間狩り」が行われた。この意味でまさに国家による性暴力行為であったと言える。国と占領軍が「狩る」という行為により、「パンパン」というあいまいな職種の女性は「落ちた女」としてさらにジェンダー化された[19]。一度目は「特別挺身隊員」として、二度目は「パンパン」として国家に「狩り」とられたのだ。「特別挺身隊員」という名のもとに、国家が連合軍の兵士のために差し出した人身御供的「性慰安婦」の行き場のない姿であったのにである。帝国が植民地に勢力を拡大していた時代、日本軍が兵士の戦意高揚のために送り出した「従軍慰安婦」と異なるものでない。吉見義明が『従軍慰安婦』(岩波新書１９９５・4)において、「『従軍慰安婦』とは、「日本軍の管理下におかれ、無権利状態のまま一定の期間拘束され、将兵に性的奉仕をさせられた女性たちの事であり、『軍用性奴隷』とでもいうしかない境遇に追い込まれた人たちである」と定義しているが、戦後の「特別挺身隊」の女たち、その後に「パンパン」と呼ば

---

18 茶園敏美『パンパンとは誰なのか　キャッチという占領期の性暴力　GIとの親密性』(インパクト出版会 2014・9)

19 平井和子『ﾌﾛﾝﾃｨｱ現代史　日本占領とジェンダー　米軍・売買春と日本の女性たち』(有志舎 2014・8)

れた女たちは、戦地に強制的に連行され一定期間拘束されたか否かという問題ではなく全く同じ問題を孕んでいる。生きるための手段として自ら選択した職業であり、言ってみれば貧困を原因とした『経済的性奴隷』であったにもかかわらず周縁化されてしまったと言える。

2、闇市のマリアと闇市に生きる人びと

焼跡の瓦礫の下から、ススキと赤と黄の葉鶏頭が鮮やかに伸び、雑草の茂る草むらには青大将も生息し、空には赤とんぼも飛んでいた。つまり、敗戦の年の秋には、すでに自然の「いのち」は始動初めていた。そんな時期、廃墟となった街には、バラック建ての急ごしらえの店舗も並び始めていた。いわゆる新宿の東口駅前に「光は新宿より」よりを掲げて台頭した闇市である。

マダム「志保」は、「気取」もない、「隠れる」のに最適と考えていた「古巣」新宿を、「生涯の決戦の場」・「生涯の居場所」と覚悟し、敗戦の１０月には、自身の「城」である酒場「芳野屋」を開店した。新宿駅東口近くの闇市の一画に、土間と板敷一間の小さな「酒場」であった。何もないところから、闇市を利用し、つまみ、おでん、銀シャリ(白米)、酒類等を提供し、夕方から翌日の朝、新宿から始発電車が運行される時間まで営業した。空腹と酒を求めた人々の安息の場はにぎわった。

「マダム」志保は、２０代の終わりに、「妻」の座を放棄し、ギャンブルに狂う夫と二人の子供を放擲し、新宿の街に埋没した。新宿一番の「カフェー」の女給として約１０年働き、「きっぷのよさ」と「さっぱりした明るさ」から人気を保ち、その「カフェー」のナンバーワン女給を通し続けた。敗戦後、酒場の常連であった客の愛人となる。この客は「敗戦のたぎり立つ混乱の中、新宿駅東口近くに再建された軽演劇劇場「赤い風車」の作者であった。志保は若き頃、芝居の脚本書きを志したが挫折したからもあろう。脚本書きをする男との出会いに「自分の人生が新し

く、ぱっと展開したと感じ」、あきらめていた青春を取り戻したようにときめいていた。「泥くさいロマンチシジムがわが手に帰ってきたような気」すら抱いて、新宿の知性「赤い風車」の復活に情熱を傾けた。新民法も施行され、夫婦単位の戸籍制度下、同じ正妻でない知人の女から「正妻でないくせに」と揶揄されたときには、嘔吐するほどに苦しみもするが、愛人である男へ真摯に手を差し伸べた。男から「金で縛られる」事を好まず、相手の好意に対し自分の「身体で返す」といったテイク・アンド・ギブの関係で生きた。愛人の演劇仲間たちには、酒場を提供し金銭や飲食物等を援助しながら、能楽の笛師（弟が笛師を承継）に家に生まれであったためか、能や歌舞伎等の日本の伝統芸や文化を好み、新宿の「第一劇場」「赤い風車」「武蔵野館」[20]等で上演される軽劇や映画を愛した。

一方、酒場を手伝っていた志保の実子ほどの年齢の娘が、基地の街・立川で米兵のオンリーになったという現実に、「可哀そうに」と「素人娘の転落」を思う母親の姿をも保有していた。毎日見ている夜の女の「女の生きてゆく手段よ。男の人だって、私たちがいなかったらこまるでしょう」と会話する姿にさばさばした健気さをも感じながらも、素人娘の転落に「あわれ」を感じ愕然とする。毎月、隅田川のほとりにある神社に手を合わせて神に祈ってもいた。商売の繁盛、弟の芸事の発展、愛人の家庭、そして自身の別れた子供たちの無事を願う日常でもあった。

「むき出しのいのちの街」新宿は、次第にやくざたちの闇の勢力が支配し、どす黒い熱気と喧嘩やメチールアルコールで命を落とした死体が街に転がっているのも珍しくもなく、すさまじい退廃を呈していた。インフレは止まるところも知らず、「りんごの唄」・「ラッキーカムカム」・「東

---

20 本庄慧一郎『新宿今昔ものがたり　文化と芸能の三百年』（東京新聞出版部 2010.6）、中野正昭『ムーラン・ルージュ新宿座　軽演劇の昭和小史』（森話社 2011・9）

京ぶぎ」の流れる闇市の雑沓の中を、何かを探して歩く復員兵(軍服、軍靴と戦闘帽をつけたまま)や、あてもなくうろつく人々、浮浪者、米兵にぶら下がって歩く赤いルージュと赤いハイヒールの女や、行き倒れ者の渦まく傷跡の中で、「マダム」志保は、街頭に立ちながら身ひとつで生きる「性を売る女たち」と共に生きていた。

また、闇市の雑踏の中には多くの「浮浪児」が生きていた。この問題については、私のこれからの研究課題とするが、幾つかルポルタージュのように切り取った表現を例示したい。１９４８年の厚生省調査では、浮浪児・戦災孤児(１８歳以下)は１２万３千余が確認され、犯罪者の温床もしくは犯罪者とみなし「浮浪児狩り」をした。ここにも戦争に巻き込まれストリート・チルドレンとなった弱者を「狩る」というジェンダー構造が見られる。彼らは、主に「もらい」「残飯あさり(乞食)」「靴磨き」「闇屋手伝い」「新聞売り」などで生ていた。佐多は、このような「浮浪児」を、「眼の表情」で切り取った。人になれない子犬にも似たおどおどした子どもたちの目、憂愁のただよう混血児の目、環状線の電車の中で眠りからすくっと起きあがり、誰も見ようともせず自己の世界に閉じこまったような浮浪児の目には、孤独な大人の荒みをすべて経験したような虚無が見られたと表現している。

さて、佐多稲子の「風になじんだ歌」は、「マダム」志保と「身ひとつで性を売って生きる」女たちに視点を当て、記録映画のようにありのままに写し取っている。たとへば、何人かの表象された女たちを見てみよう。

「銭湯でいっしょになる女たちの肌には、病毒が穴をあけている。ぱっと口をあけて、ばらの花のようにも見える。脱脂綿で押さえたそんな病巣」の身体で、それでもその身体を売る女。つまり、青線地帯の国家の性管理の外に置かれた「街の女」・「私娼」である。

また、乳頭にかけてさそりの入墨をした静子という女性は、稼ぎ高も

見た目も際立って美しく知的な雰囲気を身につけていた。しかし、「私がどんなに稼いだって、みんな親や兄弟が喰っちゃうのよ。みんなヤクザでしょうがないわ。家中、私が喰わしているのよ。いやにもなるじゃない。そりゃ、私は自分の子供をひとり、親に見させているわ。そんなことで私は弱いのね。だけど、この頃もう、自分の家に帰って親の顔を見ると、ぞっとしちゃうのよ。先のことなんて、私が考えたってどうにもなりゃしないわ。店なんか持ったら、また寄ってたかって喰っちゃうだけよ」と、だから「私が遊ぶのは、やけみたいなもんよ」と、自分に自暴自棄になり、自ら性を売って稼いだ金で「まるで男が芸者を買う」ように男を買う街の女であった。自らの運命に反抗するように虚無と頽廃の生活に生き、どうにもならない貧困と家父長制度のもとで酷使した身体は病魔に侵され死に至っている。

さらに、屋台を引く夫の手引で妻の身体を売る男に尽くす街の女（妊娠 8 カ月まで、さらに出産後 3 週間目には客をとっている）もいた。この生活の中で生まれた子どもは、夫との間に生まれた子と信じているのだ。また、年下の愛人の手引でヒロポンを打ちながら性を売り、男を養い、ひたすら結婚を願う街の女もいた。

切り取られ表象された女たちは、生まれつきのようなひどい嘘つきの女、自分のために人を蹴落としても何とも思わない女、あくどい化粧の下に純情を抱いて泣く女、怒る女、酔っ払い女、黙る女、媚びる女、酔っぱらって暴力的な女、麻薬の売人刺青を入れる女や消す女、子捨てする女たちの様々な姿であった。しかし、どの女たちも、男にたよらず、他人に不幸を転嫁せず自分の境遇を怨まず「身ひとつ」で日常的に「悲しさと逞しさにあふれた」姿で生きていたのだ。志保もまた「ここに生きている女たち同じ思い」と視線で生きていた。

マイク・モラスキーは『占領の記憶　記憶の占領—戦後沖縄・日本と

アメリカ』[21]の中で、被占領経験が日本文学にどのように表現されたかをいくつかの作品から詳細に分析している。「小島信夫の『アメリカン・スクール』や野坂昭如の『アメリカひじき』、大江健三郎の『人間の羊』や大城立裕の『カクテル・パーティー』(略)、この一連の戦後文学と称される小説群が共有しているのは、女性の体を媒介とする男性中心の物語構造」であると指摘している。男性の視点で、占領と女つまり、売春婦、オンリー等の「街娼語り」が行われ、肝心の女たちは登場するのだが、女たちは「よそよそしく眺められ」、つまり「落ちた女の物語」というジェンダー・バイヤスのかかった視点でしか語られていないと指摘している。それに対し何人かの女性作家は、戦争・闇市・占領の時代を、時代や男たちにその責任を転嫁せず、その中で苦悩しながら自立して生きる女たちの逞しい姿を描いていると分析する。佐多稲子の「風になじんだ歌」に表出された現実は、「街娼語り」・「落ちた女の物語」ではない。占領下の闇に生きた女たちの生きるための姿のルポルタージュである。男たちの語る「街娼語り」ではなく、街娼の傍らで、すさまじい喧嘩で命を落としたヒモや、自身の客引きで産後間もない女房に客を取らせている男、使い込みから自殺に追いやられたGI等の現実も写していた。

マイク・モラスキーは、広池秋子の「オンリー達」、三枝和子「その冬の死」等を取り上げ、「日本の女性たちは占領をどう描いてきたか」を論じている。女性を「国民的犠牲」者としてではなく、つまり戦争に虐げられた屈辱感、喪失感をもった弱き犠牲者としてではなく、占領時代を経験したことから、何か別の批判的視座から問題を提示していると論ずる。たとへば、広池秋子の「オンリー達」[22]は、朝鮮戦争の時代を背景として、基地の街・立川を舞台に、米兵の愛人たちの生活を描いている。

---

21 マイク・モラスキー著　鈴木直子訳　『占領の記憶　記憶の占領　戦後沖縄・日本とアメリカ』(青土社 2006・3)

22 雑誌『文学者』(１９５３・１１月号)

米兵に完全に依存しているオンリー達に、法律的に結婚している女性と異なるのか否かという古くて新しい問題を会話させている。つまり、GHQ指導下新憲法も制定され、憲法２４条のもと民法改正がなされ、女性の法的地位が飛躍的に改善された。配偶者の選択、財産権、相続、離婚ならびに家族に関して、個人の尊厳と男女両性の本質的平等が明記された。特に、婚姻は、両性の合意に基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならないとされた。「オンリー達」に登場する米兵のオンリー達は、新しい民法で保証された法律的結婚、妻の地位の問題を議論する。法律的に妻でないオンリー達は、米兵一人に囲われる愛人又は妾のような不安定な地位に不満を感ずる女もいたが、法律に縛られない自由な女の生き方と考えた女もいた。つまり、法律で保護されている妻の立場に疑問をもち、はるかに越境した自由な生き方を生きる女たちを表現していたからだ。

また、戦後の女性の姿を写した、三枝和子の「その冬の死」[23]を見てみよう。復員兵、RAAの娼婦として働く元「慰安婦」、５歳の戦争孤児の少女、その少女を引き取って育てる老人、ヤミ商人、占領兵士に強姦された若い女学生を登場させ、占領下におけるジェンダーとセクシュアリティ、結婚と売春の問題を表現している。特に強姦される少女を見て見ぬふりする傍観者、この傍観者には、根深く残る少女の父親（強姦された少女に、家の恥だ死ねと言う）に体現された家父長制そのものを提示している。また、占領者に「汚された」女は、死ぬか、娼婦に落ちるしかないと考えるジェンダー・バイアスがかかった社会の目は辛辣である。もう一人登場するパンパンは、東南アジアで日本軍相手の娼婦をしていたが、それは家のため、家族のためではない、自分の意思で娼婦の道を選択していた。家父長制度の家長、つまり「父親から離れたかった」からであった。自由になる方法であったのだ。そして、戦後も彼女は娼婦

[23] 雑誌『群像』（１９８８・９月号）

を職業と選択して生きていくのだ。

マイク・モラスキーは、ある女性が娼婦でも正式な妻でもないとなれば、妻になるという夢に必死に固執するであろうという一般的思想を批判し、三枝和子の「その冬の死」の中に、「妻の役割は、オンリーや娼婦のそれとは全く別の次元ではなく、女性抑圧の連続帯の中で互いに重なり合った領域」であると同じ地点を見ている。この結論は、佐多稲子の切り取った街の女たちの中にも読みとることが出来る。街の女たちは、街に立ちながらも、「妻」の立場に飛びつくものもいるが、女性抑圧の連続性といった妻の立場を選択せず、娼婦という自由な立場を自ら選択する姿も写し取っているからである。

さらに、マイク・モラスキーは、雑誌『改造』に掲載された座談会「パンパンの世界—実態調査」[24]を取り上げ、日本の代表的雑誌『改造』ですら、「パンパン」という女性への偏見的な視点、つまり、「堕落した女」という回答を導き出そうとした仕組まれた座談会であると指摘している。座談会参加者は、「パンパン」を選択して生きている女性５人、３名の大学教授、１名のジャーナリスト、それに作家三島由紀夫と佐多稲子であった。佐多稲子は、小説「薄曇りの秋の日」[25]の中に、その座談会での印象を切り取っている。この短編小説の内容は、基地の街立川で、息子と一緒に映画を見た帰りに、息子の小学生時代の同級生が、電車の中で米兵あさりをするパンパンであることを目撃した時、座談会であった女性（パンパン）達に思いをはせる。佐多は、パンパンと言う仕事を選ぶ女性を「堕落」とも見ていないし、「同情」もしていない。「選択」した姿とみて、戦争中に家の事情で公娼をせざるをえなかった女や、戦後の「パンパン」と呼ばれる街娼をする女性の、厳しい時代に置かれた生活状況

---

24 雑誌『改造』（ 1950年１２月号７４－８１頁）　聞き手：：飯塚浩二・宮城音弥・三島由紀夫・森田政次・南博及び佐多稲子　語り手：田中文子・三浦美紀子・北沢とし子・藤沢七生及び伊藤あき子

25『小説新潮 』1950年･11月号　４巻１２号８２－９１頁

の深層を冷静に見つめている。「パンパン」をせざるを得ない同級生を、息子とともに「たまらん」と見ている。「風になじんだ歌」の中にも、立川で、GIのオンリーになった女性を「落ちてしまった」と溜息もするが、しかし、その視線の先には「たまらん」と批判的視線を明確にしている。

３、闇市で「紡がれた」―ひとつの戦後史

「風になじんだ歌」は、１９６６年(昭和４１)年２月から翌年１月まで雑誌『新潮』に１２回にわたって連載、翌年１９６７年(昭和４２)年に単行本として新潮社から上程している。１９５２年の占領の時代が終了してから、実に１５年も経過している。が、再び、この時期に戦争の記憶にたち戻っている。

佐多は「日本の中で、日本の問題として、ここに立つ」と前衛党から離れ、自らの独り立ちの姿勢を、１９６６年の「塑像」[26]において明確にしている。「塑像」連載より１ヶ月後から佐多は「風になじんだ歌」の連載を開始している。この時期、二つの作品を同時に書き紡いでいたことになる。長谷川啓[27]が指摘しているように、「塑像」は自己の自立宣言であったのに対し、「風になじんだ歌」はこの自立宣言にたいする「意思の裏付け」となった作品であろう。佐多は、人間の実感に根ざしていない当時の前衛党のあり方に対峙し、あらためて生きるために泥にまみれてうごめくすべての「いのち」を照射し、見つめなおそうとした。だから、戦後の新宿の焼跡の「いのち」に向き合ったのだと思う[28]。テクストの冒頭の「そこは、いのちの街であった」から始まる書き出しに、佐多の強い意思表明を読み取ることができる。いのちに向き合った新宿の１０

---

26 『群像』1966・1月から7月号に連載

27 長谷川啓『解題「塑像」以後』(佐多稲子全集第13巻　講談社1979・1)

28 1966年4月、婦人民主クラブ創立20周年記念大会において、佐稲子は「『生きる』ということ」と題して講演している。ここにもこの時期の佐多の「いのち」への関心がうかがえる。

年の歩みは、「大きくゆさぶって、じゃりをふるい落と」していような建築ラッシュを前に、佐多は、単行本にする際に、街の近代化に佇み、ためいきしながらも、戦後を歩み出している志保に、佐多自身の内面を重ねたと思われる最終文を追加している。

「秋の夕暮は早く、もうすっかり暮れていた。街の雑閙が黒く見えて、肌寒い風が吹く。救急車がサイレンを響かせて疾走して行った。その一瞬タクシーの流れが変わる。ほんの一瞬。おびただしい車の流れはすぐ元にかえってクラクションがいっせいに鳴る。終戦直後の二、三年、この街で何々組がリヤカーの人力車を走らせた。今日のタクシーの流れからは想像もできなかった。この変化の中を志保は自分の足で歩いてきた。が、巨大に揺れうごいているこの街のエネルギーに対して、柳井志保はまだ息を抜くひまはない。そうおもうと志保は、何だか胸の中にむなしい風が吹き通る気もしないではなかった。志保はそんな自分の気持ちにも抵抗している。渦が激しいからそんな気持ちにも負けていられない。この街はすでに柳井志保の、命をかけた街だった。激しい人の流れの中で、柳井志保の肩つきが挑むように動いていた。柳井志保は顔をまっすぐ前に向け、下駄の足を踏みしめて急いでいる。彼女の城，芳野屋はもう客をむかえる時間であった。」

街の近代化と復興を目の当たりにし、「民主主義くそくらえ」や「終戦になったって、何も変りゃしないじゃないか」と酔客にいわせ、それでも、「命をかけた街」を、下駄の足を踏みしめながらあるき酒場を開いていた。物資不足、激しいインフレ、食糧不足からの米よこせのデモや血のメーデー事件、三鷹、松川事件、朝鮮戦争等の社会情勢を絡ませながら、闇市の酒場から、焼け跡に生きる人々に、食べ物、仕事、心の安らぎを与えていた。生来の「ふとっぱら」な性格で静かに見守っていた「女親分」、言ってみれば新宿の女・割烹着を着た「マダム」の存在は、「行き場のない女たち」「娼婦」「やくざ」「浮浪児」「戦争未亡人」「引揚者」

さらに「第三国人」達にとっての「いのち」のシンボルとなっていった。そこに「闇市のマリア」のような佇まいと姿がくっきり浮かびあがる。特に、深層に傷を抱え、性を売って生きる底辺の女たちに対し、「堕落した女」とか「可哀そうな女」と言う視点でなく、同じ目線で接した。「たまらん」社会状況の中で、女たちの深層まで深く立ち入りそして共に生きた。だから、闇市で行われた「パンパン狩り」を、「パンパンといわれた女たちは、ときどきトラックに積まれた。いっときざわついても闇市も女もすぐに平常にもどった」とごく自然に受け止めることができたのだ。

「風になじんだ歌」は、闇市という「外地」に立ち、泥まみれになりながら底辺の女たちと共に、まさに「山姥」[29]的存在として生き抜いた「闇市のマリア」の記憶[30]と「闇市のマリア」の一つの戦後史の表象であったと言える。モランスキー[31]のいう、闇市は「戦後の新時代」を代表する光景でもなく、パンパンと呼ばれる女たちは「新人類」でもない。時代の流れの中で必然的に登場した現象と人びとであったのである。

以　上

テクスト　『佐多稲子全集』第１３巻（講談社 1979・1）
佐多稲子『風になじんだ歌』（新潮社 1967・2）

参考文献

１、半藤一利・竹内修司・保阪正康・松本健一『占領下の日本』上・下）（筑摩書房 2012・8）

---

29 水田宗子・北田幸恵編『女性の原型と語りなおし　山姥たちの物語』（學藝書房　2002・2）

30 岡真理『（思考のフロンティア）記憶/物語』（岩波書房、2000・2）は、「〈出来事は、まず語られねばならない。伝えられねばならない。〈出来事〉の記憶は他者と共有されねばならない」と述べている。

31 マイク・モラスキー編『街娼　パンパン＆オンリー」』（皓星社 2015・11）

2、尾津豊子『光は新宿より』(K&Kプレス 1998.4)
3、新宿の歴史を語る会・文　東京にふる里をつくる会『新宿の歴史』(名著出版 1997・8)
4、村上しおり・梅宮弘光　『戦後神戸におけるヤミ市の形成と変容―「三宮自由市場」の事例を中心に』神戸大学大学院人間開発達環境学科研究紀要第4巻第2号
5、大阪闇市焼跡闇市を記録する会『大阪・焼跡闇市－ボロボロの戦後史』
6、藤目ゆき『性の歴史学』(不二出版 1997・3)
7、岡野幸江・長谷川啓・渡邊澄子編『買売春と日本文学』(東京堂出版 2002・2)
8、伊豫谷登士翁・平田由美編『「帰郷」の物語/「移動」の語り　戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』(平凡社 2014・1)
9、ジョン・ダワー著　三浦陽一・高杉忠明・田代泰訳『敗北を抱きしめて』上・下(岩波書店 2001・5)
１０、雨宮昭一『占領と改革』(岩波新書 2008・1)
１１、吉見俊哉『ポスト戦後社会』(岩波新書 2009・1)
１２、吉見俊哉『焼跡からのデモクラシー』上・下(岩波書店 2014・3)
１３、栗原彬・吉見俊哉編『ひとびとの精神史　敗戦と占領　1940年代』(岩波書店 2015・7)